



第45回「おかねの作文」コンクール

## 風呂掃除から見えてきたもの

神奈川県・横浜市立市ヶ尾中学校 2年 大道 希音

「もったいない」

アフリカ人女性として初めて、ノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイさんは、この言葉を世界に広めた人だ。2011年に彼女が亡くなった時、土葬が一般的なケニアで環境や経済的なことを考えて、自ら火葬を望んだという。マータイさんは、亡くなった後も、人々にメッセージを残したのだ。

「もったいない」。私には、無縁の言葉だった。「盗人に追い銭」という言葉を、母はよく使う。「損の上に損を重ねる」という意味らしい。これは、兄が塾に行っても成果がない時や、私が無駄遣いをした時などに、よく使われる。

私は、数え切れないほどの筆記用具を持っている。筆記用具だけではない。たくさんモノを持っている。「カワイイ」という理由で必要かどうかなど考えずに購入した。そのことで、よく両親にとがめられる。「そんなモノを買うくらいなら、募金しなさい」「もったいないでしょ」と。もったいないと自分でも、使い切れるはずのない筆記用具を見てそう思う。

私は、お金は大切だと思う。欲しいモノが買えるし、行きたいところにも行くことができる。でも、私は中学生なので自分で働いてお金を稼ぐことはできない。だから、親からお金をもらっている。親が働くのが当然で、両親ともに働いているのだから、お金をくれて当然だと思っていた。

その上、私は、家の手伝いをほとんどしない。夕食の準備が、少し遅れただけで、母に文句を言ったりする。働いている母に向かって、「私だって、学校に行って、部活もしている。時間がないのは同じ」と屁理屈をこねる。

こんな私を見かねた両親は、何か高価な買い物や、コンサートやテーマパークなどの出費の多い場所に友達と出かける場合などは、私に家の手伝いを義務づけ、それでも買いたいかを考える時間を与えた。そのことで自分にとって本当に必要なモノなのか、友達に誘われたから安易に流されてしまっただけではないのか、冷静





に考えることができた。

さらに、両親は、学用品や食費などを除く私への出費を表にして壁に貼<sup>は</sup>り付けた。壁に貼られたその表を見て、自分がいかに両親にたくさんのモノを買ってもらっていたかよくわかった。このことは今後、自分で小遣い帳をつけることで自覚していきたい。

今、私は、コンサートに行ったこととの交換として、風呂掃除3ヶ月を実行中である。いつもは、学校に行く前に風呂掃除を済ませるようにしているが、部活の朝練などで、掃除ができなかった時など、はじめのうちは、「家に帰ったら、誰かが掃除してくれるだろう」と思っていたが、その考えは甘かった。誰も手伝ってはくれない。兄が時々、掃除してくれているが、ちゃんと代わってもらった分の回数が、後で加算される。

毎日の風呂掃除の中で見えてきたものがある。それは、働くことがいかに大変かということと、お金のためではなく、家族の一員としての役割をはたしているという達成感を味わえた。さらに、大切なお金を安易に消費することが「もったいない」という気持ちがわいてきて、周りのことが見えるようになった。

「もったいない」は、モノを買うことだけではない。誰もいない部屋なのに電気がついている。シャワーや水道が流しっぱなしであるなど、それぞれの1回の金額は小さいかもしれないが、1日、1ヶ月、1年の単位でみると大きな金額になるだろう。これらの金額は、お金を自分で稼ぐことのできない私にとっては、大金だ。世界に目を向ければもっとある。

東日本大震災の後、日本では原発再稼働の問題がある。原発を再稼働しなければ、火力発電が復活する。日本では、石油も、石炭もほとんど産出されない。だから、どんなに値段が高くても輸入するしかない。でも、その天然資源は枯渇の危機にある。無駄なく、大切に使わなければ、未来世代の人々に残すことができない。

マータイさんは、「感謝することがモットイナイ精神の最も大切なこと」という言葉を残している。私の今までの感謝は、私の生活を豊かで便利にしてくれる携帯電話やエアコン、おいしい食べ物に対して向けられていた。なにか大きな勘違いをしていたのだ。でも、これからは、例えば、食べ物を食べる時には、自然の恵みや、流通に携わった人、調理してくれた母に感謝できるような人になりたい。

そうすることによって、本当の意味でのお金の大切さや感謝する気持ちが、わかる人になれるような気がする。

